

『境界を越えて——比較文明学の現在』第21号をお届けする。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行という状況の中、2020年度は大学、大学院もさまざまな困難に直面した。授業や研究交流会等をオンラインで行い、活動を止めない方法を模索する日々が続く。

本号はそのような時間から生まれた成果である。巻頭インタビュー、専攻関係教員寄稿、論文、研究ノート、優秀修士論文、研究交流会記録2点、院生による書評5本から成る。

巻頭インタビューは、国文学者であり、現代を代表する詩の書き手である藤井貞和氏にご登場いただいた。広い視野のもとに研究と執筆を重ねて来られた氏にお話を伺いたいという考えからご依頼した。感染対策が求められる中、ご協力いただいた。感謝を申し上げたい。

専攻関係教員の寄稿として新任の渡名喜庸哲氏のハンナ・アーレントに関する論文を掲載できたことは喜びである。本号の続きの執筆が予定されているとのことで、次号への期待も膨らむ。

各自の視点と論点を深める姿勢を反映する論文、研究ノート、さらに優秀修士論文の掲載が叶ったことにより「比較文明学」の在り方を問う多彩な号となったのではないか。また、研究交流会記録は、研究をめぐる対話として充実した内容となっている。院生の書評を掲載する企画はこれで4年目だ。定着してきたといえるだろう。

編集とデザインに関しては、深澤晃平氏、長田年伸氏にご尽力いただいた。迅速かつ柔軟な対応をしていただいたことに感謝したい。

私にとって、本号の編集委員は、立教大学に着任して初めての仕事の一つとなった。関係各位に心より御礼を申し上げる。

2021年2月

蜂飼耳